

寐顔

永井荷風

青空文庫

童子りゆうこは六歳の時父を失ったのでその写真を見てもはつきりと父の顔を思出すことができない。今年もう十七になる。それまで童子は小石川こいしかわ茗荷谷みよがだにの小じんまりした土蔵付の家に母と二人ぎり姉きょうだい妹いのようにくらして来た。母の京子は娘よりも十八年上であるが髪も濃く色も白いのみか娘よりも小柄こがらで身丈せいさえも低い処から眞実姉妹のように見ちがえられる事も度々たびたびであった。

童子は十七になった今日でも母の乳を飲んでいた頃ころと同じように土蔵につづいた八畳の間に母と寝起ねおきを共にしている。琴三味線こしぎみせんも生い花茶いけばなの湯ゆの稽古けいこも長年母と一緒にである。芝居まへも縁えん日にちへも必ず連立つれだつて行く。小説や雑誌も同じものを読む。学課の復習試験しの下した調たしらべも母が側そばから手伝てうので、年と共に童子自身も母をば姉か友達のように思う事が多かつた。

しかし十三の頃から童子は何の訳わけからとも知らず折々こんな事を考えるようになった。母はもし自分というものがなかったなら今こん日にちまでこうして父のなくなつた家にさびしく一人で暮してはおられなかつたかも知れない。自分が八ツの時亡くなつた祖母の家にとうに帰つてしまわれたかも知れない。母がこの年月ここにこうしておられるのは全く自分の

生れたためではないか。童子は母が養育の恩を今更のように有難く忝なく思うと共に、また母に対して何とも知れず気の毒のような濟まないような気もして自然と涙ぐんだ。それ以来童子は唯に母と自分の身の上のみならず見廻す家の内の家具調度または庭の植木のさまにまで底知れぬ寂しさを感ずるようになった。

家の内には童子が生れた時から見馴れた箆筒火鉢屏風書棚の如き家具の外に茶の湯裁縫生花の道具、または大きな硝子戸棚の中に並べられた人形羽子板玩具のたぐい、一ツ一ツに注意すればむしろ物が多過ぎるほど賑かに置かれてある。それにもかかわらず家の内はいつもしんとして薄寒いような気にするほど静である。

日当りのいい縁側には縮緬の夜具羽二重の座布団や母子二人の着物が干される。軒先には翼と尾との紫に首と腹との真赤な鸚哥が青い籠の内から頓狂な声を出して啼く。さして広からぬ庭には四季断えず何かしら花がさいているが、それらの物のハデな艶しい色彩はかえって男気のない家の内の静寂をばどうかすると一層さびしく際立たせるように思われる事があつた。

日頃母子の家に出入する男と云つては、日々勝手口へ御用を聞きに来る商人の外には、植木屋と呉服屋と家作の差配人と、それから桑島先生という内科の医者くらいのもの

であろう。いずれも竜子の生れない前から出入していた人たちで、もう髪の色が白くなっているものも一人もない。

橘屋 たちばなや

という呉服屋の番頭は長年母の実家の御出入であった関係から母の嫁入した先の家まで商いを弘めたのである。差配人の高木というのは亡くなった主人が経営していた会社の使用人で長年金庫の番人をしていて堅い老人である。植木屋は雑司ヶ谷から来る五兵衛という腰のまがつた爺であったが、竜子が丁度高等女学校へ進もうという前の年松の霜よけをしに来た時、徴兵から戻って来た亀蔵という伴を連れて来て、自分は年を取って仕事に出られなくなったからこの後は親爺同様に伴をお使い下さるようにと頼んで行った。長年かかりつけの桑島先生が老病で世を去ったのもやはりその頃であった。

竜子は或日学校から帰って来た時、前夜からすこし風邪をひいていた母の枕元に年の頃は三十四、五とも見える口髭のうつくしい見知らぬ医者の方を見て、竜子は桑島先生の死後その代りに頼むべき医者のことはまだ一度も母から聞いていなかった。その日突然見知らぬ若い医者の方を目にした時、竜子は何のわけもなく、この医者も丁度植木屋の五兵衛が伴の亀蔵を頼んで行ったように、桑島先生の生きていた時からその代りとして推薦されたものであろうと思った。そしてその時には岸山先生というその

名前さえ母には問わなかつた。

新来の若い医者は三日ほどたつてまた診察に來た。童子は母の枕元で話をしながらシユウクリイムを一口頬張つた所なので、次の間へ逃出して口のはたと指先とをふいた後靜に元の座に立戻つた。医者は母に向つて食慾の有無とまた咳嗽が出るか否かを簡単にきいたばかりで、脈搏も見ず体温も計らず、また患者の胸に聴診器を当てても見なかつた。そして携えて來た鞆から処方箋を取出して処方を確認するとそのままだまつて座を立つた。童子は老つた桑島先生の診察がいつもいやになるほど念入れであつたのに引くらべて、岸山先生の診察ぶりのこれはまたあまり簡單過ぎるのに少し頼りないような氣もして、女中と一緒に玄關まで送り出した後母の枕元に坐るが否や、

「おかア様、今度の先生はどこも見ないんですね。あれでいいんでしょうか。」というと母は別に重い病氣ではない唯風邪を引いたばかりだからあれでいいのでしょうかと答えて、安心してゐる様子に童子もそれなり何もきかなかつた。もともと童子は年とつた桑島先生を深く信用してゐる訳ではなかつた。唯經驗を積んだ御世辞のいい開業医に過ぎない事を知つていたので、新来の岸山先生の簡單な診察ぶりと愛想氣のない態度についてはかえつて學者にふさわしいような氣もした所から、その後病氣になつた時には母のすすめるの

を待たず進んで岸山先生の診察を受けた。

或^{ある}晩^{ばん}竜子は母と一緒に有^{ゆう}楽^{らく}座^ざへ長^{なが}唄^{うた}研精会の演奏を聞きに行った時廊下の人^{ひと}込^{こみ}みの中で岸山先生を見掛けた。岸山先生は始めて診察に来た時の無^ぶ愛^{あい}想^{そう}な態度とはちがつて鄭^{てい}寧^{ねい}に挨^{あい}拶^{さつ}をした。それから暫^{しば}くたつてやはり母と一緒に帝国劇場へ行つた時また岸山先生に出会った。そして誘^{さそ}われるままに紅茶を飲んだ。竜子は帰りの電車の中で岸山先生が長唄を習っているということをお母から聞いた。

母^{おや}子は毎^{まい}年^{とし}八月になると鎌倉か逗^ず子^しかへ二、三週間避暑に行く。竜子が十五になった時の秋、東京にコレラが流行して学校は九月末まで休みとなった所から、母子は一度東京へ帰つてまた鎌倉へ引返した事があつた。滞^ど在中^{ちゆう}に二度ほど岸山先生が見えた。二度とも鎌倉のある病^び家^{やう}へ往診^{びやうしん}に来たついでだという事であつた。二度目の時竜子は母と先生と三人して海水を浴びに行つた。晩^{ばん}食^{めし}をも一緒にすましてから先生は最終列車で東京へ帰る。それをば母子は涼みながら停車場まで送つて行つた。

次の年、竜子はもう十六である。去年と同じように鎌倉に避暑していた時竜子は毎日母と二人ぎり差向いのたいくつきに、今年も岸山先生が遊びに来て下さればよいのにと言つたが、母は笑つたばかりで何ともいわなかつたので、次の日竜子は「わたし先生に手紙を

上げて見ましようか。」というと母はちよつと竜子の顔を見てすぐに笑顔えがおをつくり、「病気でもないのに、お気の毒です。」と言った。

東京に還かえつてからその年は冬になつても母子二人ともに風邪一つ引かなかつたので、竜子は岸山先生の姿を見ずに間まもなく十七の春を迎えた。

梅がさきかけた時分、或る日学校からの帰り道竜子は電車の中で隣に腰をかけている二人連づれの見知らぬ男の口から、茗荷谷みよがだにという自分の住んでいる町の名と、小林という自分と同じ名前が幾度か言出されるのをふと聞きつけて何心なく耳を澄すました。二人とも洋服を着た三十代の男で頻しきりに岸山医学士の事を噂うわさしている中なかに確たしかに母の京子と覚しい或女の事が交まじえられている。竜子は車体の動揺車輪の響ひびきと乗客のざわつく物音にもかかわらず二人の談話の何たるかを明あきらかに推察することが出来た。急に顔が火のようにほてつて来る。胸の動悸どうきが息苦しいほどはずんで来る。電車がとまった。竜子はついと立上つて込こみ合あう乗客を突きのけて車を下りた。「乱暴な女だな」と驚いたものあつた位なので竜子は停留場のいずこであるかも暫しばらくは知らなかつた。

空は晴れているが風が強いので面おもても向けられぬほど砂ほこりの立つ中を竜子は家まで歩き通しに歩いた。

その夜竜子はいつものように、生れてから十七年、同じように枕を並べて寝た母の寐顔ねがおを、次の間まからさす電燈の火影ほかげにしみじみと打眺めた。

日が暮れてもなお吹き荒れていた風はいつの間にかぱったり止やんで雨だれの音がしている。江戸川端えとがわばたを通る遠い電車の響も聞えないので時計を見ずとも夜は早や一時を過ぎたと察せられる。母はいつもと同じように右の肩を下に、自分の方を向いて、少し仰向あおむき加減に軽く口を結んでいかにも寝相ねぞうよくすやすやと眠っている。竜子は母が病気の折にも、翌朝学校へ行くのが遅れるといけなからと言われて極きまった時間に寝かされてしまう所から、十七になる今日が日まで、夜半よなかにしみじみ母の寐顔を見詰めるような折は一度もなかった。束髪そくはつに結ゆつた髪は起きている時のように少しも乱れていない。瞼まぶたしずかが静まに閉まざれているので濃い眉毛まゆげは更に鮮あざやかに、細い鼻と優しい頬ほおの輪郭ななめとは斜ななめにさす臃おぼろげ気な火影ほおに一層際き立つてうつくしく見えた。雨は急に降りまさって来たと見えて軒を打つ音と点滴の響きとが一度に高くなつたが、母は身動きもせずすやすやと眠っている。しかしそれは疲れ果はてて昏睡こんすいした傷いたましい寝姿ではない。動物のように前後も知らず眠ねむりむさほを貪ねむりむさほつた寝姿でもない。竜子は綺麗きれいな鳥が綺麗きれいな翼くちばしに嘴くちばしを埋めて、静まに夜の明けのを待っている形を思い浮べた。竜子は岸山先生と母との関係についてはもう何事も考えまいと思つた。電車の中で耳に

した噂うわさが根もない事であつたら無論それに越した事はない。万一事実であつたらそれは母の寂しい生涯に果敢はかない一点の色彩を加えた物語として竜子は出来るかぎり美しい詩のよ
うに考えよう。この後不幸にしてこの噂が世間の人の口にいい伝えられるような事があつ
ても、自分だけは母に対しては何事も知らないような顔をしていようと考えた。

そして竜子は母の方を向いて母と同じように行儀よく静に目をつぶった。けれどもすぐ
には眠られなかつた。夢とも現うつともなく竜子は去年の秋頃から通学する電車の中で毎朝見
かける或学生の姿を思い浮べた。袂たもとの中へいつの間にか入れられてあつた艶書えんしょの文句を
思出した。艶書は誰にも知られぬ間に縦横たてよこきれぎれに細かく引裂ひききかれて江戸川の流に投
げ棄すてられたのである。竜子は意外な夢にわれから驚き覚めると、目の前にはすやすや眠
っている母の顔がほのかに白く浮んでいる。しかし竜子は最早や最初のように驚異の情を
以て母の寐顔を見はしなかつた。何という訳もなく一層親しい打解けた心持で母の顔を見
詰つめている中次第うちにつかれて今度はぐっすり寝入ってしまった。

大正十二年二月稿

青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風全集 第七卷」岩波書店

1963（昭和38）年4月12日

初出：「女性」

1923（大正12）年6月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「寐顔《ねがお》」となっています。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寐顔

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>